

工場オフィスのレイアウトを大胆に改善 間接業務効率化と 働きやすい職場づくりを徹底追求

マックス

マックスは、従業員満足度向上と働きやすい職場環境づくりに注力している。今年8月、主力生産拠点の玉村工場(群馬県佐波郡)の事務所(オフィス)フロアを約30年ぶりに全面刷新した。オフィスリニューアルに当たりプロジェクトチームを結成し、従来のオフィスイメージを抜本的に見直した大胆なレイアウト改善を実施。並行して間接部門の業務能率を高めるための改革も進めている。

多岐にわたる産業分野の自社製品を 計画主導方式で生産

1942年に創業したマックスは、1952年に国内初の小型ホッチキスを製造した。この代名詞ともいえるホッチキスを基盤に、各種ステーションリー商品や事務機械を開発。表示物やラベルを手軽に印字できる「ビーポップ」は工場内の安全表示の作成にも広く利用されている。紙を「とじる」事務製品のほかに、「打つ」「締める」「結ぶ」機能を

搭載したファスニング機器を建築、農業、食品分野へ幅広く展開。特に建設現場で用いられる鉄筋結束機は大ヒットし、海外の建設現場でも普及が加速している。

これらの多岐にわたる製品を群馬県内にある玉村、藤岡、吉井、倉賀野の4つの工場と海外工場で生産する。中でも玉村工場は開発拠点となる主力生産拠点で、釘打機や鉄筋結束機、表示作成機「ビーポップ」などを製造している。

週単位の計画主導のMRP生産方式をとり、リードタイム短縮を図るため改善活動にも積極的に取り組む。特に「見える化」に注力しており、単なる表示ではなく、掲示した情報を読み取って、即時に行動に移せるための「見える化」を徹底。たとえば、生産フロアに設置された「人員配置管理モニター」(写真1)は生産状況の優先度からラインメンバー構成を決定し、誰をどのラインに配置するかがひと目でわかる仕組みで、各ラインの

写真1 人員配置管理モニターでメンバー構成や勤怠状況を表示



会社概要

会社名：マックス㈱
所在地：〒103-8502
東京都中央区日本橋箱崎町6-6(本社)
〒370-1117
群馬県佐波郡玉村町川井1848(玉村工場)
設立：1942年
従業員数：2,539名
事業内容：ホッチキス、ホッチキス針、ラベルプリンターなどのオフィス機器の製造・販売、釘打機、ステープル、鉄筋結束機、浴室暖房・換気・乾燥機、野菜結束機、袋とじ機などのインダストリアル機器の製造・販売

工程管理システムにも連携する。

また、各工程でタブレット端末を活用した進捗管理を導入。手入力作業を極力廃止し、ポカミス予防やトレーサビリティ管理を徹底するなど、生産のデジタル化を推進している。

間接部門の能率向上が課題

良い改善アイデアは他工場へと横展開するなど、4工場で改善活動や5Sが浸透している一方で、間接部門は改善文化が根付いているとは言えない状況にあった。樋口浩一専務取締役(上席執行役員 生産本部長兼システム統括担当)は「間接部門では工場のように5Sが進んでいないことが課題でした。コンサルタントの指導のもとで間接業務の能率向上、その結果として“活人プロジェクト”による新しい取組み、また、さらなるレベルアップと改革の一環で紙の削減に取り組みました」と説明する。

間接業務のフローチャートを作成し、PC業務のアウトプットに紙出力が必要かを精査。不必要な書類を保管せず、PDFでデータベース化するなどに取り組んだ結果、紙量は1年目で50%、2年目でさらに30%、改善前から比べて約80%削減。77個あったキャビネットは20個まで削減した。

「紙自体は決して不必要なものではありません。当社はホッチキスなど印字製品を供給してきましたので、紙は重要なものです。ただし無用なもの、見ないものをいつまでも保管していることが問題なのです」と樋口専務は話す。

メイン通路を曲線の動線へレイアウト改善

こうしてかねてから間接業務改革が進行していたが、「きれいなオフィスにしよう」という樋口専務の号令により、昨年末にオフィスフロアをリニューアルすることが決定した。その背景では空調設備を刷新したことによりスペースが生まれたため、間接部門の一部であった品質保証部を生産部門に近い場所に配置転換し、それに伴い従来のオフィススペースに生まれたスペースをどう活用するかが議題となったのである。そこで、レイアウト

写真2 左から生産本部室資材部の富宅真優子氏、樋口浩一専務取締役、生産本部設備設計部の小濱幸一部長、都丸高道次長



トを抜本的に改善することになった。

オフィスリニューアルに当たり、樋口専務を筆頭にプロジェクトチームを結成。その中心的な役割を生産本部設備設計部の小濱幸一部長、都丸高道次長、生産本部室資材部の富宅真優子氏が担った(写真2)。

2020年1月、オフィス家具メーカーのデザイナーから最初のデザイン案が提案された。それは部署ごとに島になった、一般的なオフィスともいえる、いわゆる“スタンダード”なレイアウトだった。今回、樋口専務は従来のオフィスイメージにこだわらず斬新的に変えようと考えていた。そこで4つの入口をどう使うかを思案していたところ、大胆な発想がひらめいた。入口から食堂に向かう出口をメインの動線として曲線でつなげるという斬新なレイアウトだ。「動線は角を取るより、曲線にとったほうが動きやすいのです」と樋口専務は強調する。

曲線のメイン通路を起点に固定席とフリーアドレスの席を配置することが決まり、さらに最適なレイアウトを追求し何度も検討を重ねた(図1)。

座席配置は将来を見据えて汎用性を高める

働きやすい、快適な職場とはどんな環境、空間なのか、あるべき姿を描くことから始まった。今回のオフィスリニューアルは樋口専務の独創的なアイデアや発想が主導となって進められたが、ま